

言語景観の教材化と授業実践*

-異文化コミュニケーション科目におけるビデオ教材・教科書の活用-

磯野英治**

〈Abstract〉

The development of learning materials and courses of linguistic landscapes* : The utilization of video materials/textbooks in intercultural communication courses

The purpose of this study is to report the first ever attempt to develop learning materials (video/reading materials) for a “course focusing on linguistic landscapes”, and discuss outcomes of the implementation of these materials in the course.

The course was conducted as a specialized subject, enrolled by a multicultural group of students mainly belonging to an international faculty referred to as “Intercultural Communication”. A total of 132 students enrolled in the course (of which 21 were international students). Prior to learning, a “survey of linguistic landscapes”, that was based on a 5-point evaluation scale and a free description, was conducted to observe the students’ awareness of linguistic landscapes. The 5-point evaluation scale showed an average figure of 2.46 and comments obtained through the free description survey were superficial. Therefore, it was evident that the students’ overall awareness of linguistic landscapes was low.

A total of 15 classes were held, with each having a specific theme according to the prepared video or reading material. The classes began with less difficult themes and gradually progressed to those more complex. The first seven classes were straightforward, introducing linguistic landscapes with obvious features. Subsequent themes discussed the importance of knowledge about countries, regions, or societies, observational skills of cultural backgrounds and linguistic awareness of people, and pragmatic analysis. The consistent learning contents and goals in all the themes was “to enroll in a Japanese course (which is the target language for international students), acquire diverse perspectives and thinking abilities, and gain discussion and presentation skills while also learn what can be understood through Japanese linguistic landscapes in daily life.”

After completion of the course, a final term report was assigned to assess the students’ achievement level. More than half of the students had written reports on difficult themes, indicating their increase in awareness of linguistic landscapes and they had learned “how to observe and analyze linguistic landscapes”, which also supported the effectiveness of this course.

Field: Japanese Education

Keywords: Linguistic landscape, Development of teaching materials, Conducting courses, Intercultural communication

1. はじめに

*本稿は、韓国日本語学会第41-42回国際学術大会（漢陽Cyber大専校,2020.9.19.）で口頭発表した内容を修正・加筆したものである。

**名古屋商科大学 国際学部 准教授、日本語教育学

街中にある看板やポスター、ラベルやステッカーなどの書き言葉がレアリアなどとして授業の一部に活用されることはこれまでもあったが、自然と目に入るこれらの身近な書き言葉を「言語景観」と定義、明記して「教育に生かすためのまとまった論考や教材の提供」を行ったものはない(磯野・西郡2017、磯野2020)。しかしながら、言語景観研究の広がりに伴って、言語景観が教育・学習のための素材として有用であることが指摘されはじめ、授業実践についても論じられ始めている(磯野2011,2013a,b,2015,2019,2020、鎌田2014、ロング2014,2017,2019、磯野・西郡2015,2017、西郡・黒田ら2016、李2019、甲賀2019)。ここでの「指摘」とは、言語景観を言語・社会研究だけではなく、日本語教育や異文化コミュニケーション教育に活用できるのではないかという観点と方法論に関する試論、そして「授業実践」とは、授業における事例的な導入や部分的な活用、加えて発展的には言語景観そのものを授業の中心におくような教材作成や1科目としてのデザインを指し、それぞれ以下のようにまとめることができる。

- (1) 言語景観を教育に応用するための観点と方法論に関する研究
- (2) 言語景観を部分的に活用した教育の事例研究
- (3) 言語景観を中心に据えた教育実践

上記のように、言語景観を教育に活用するための研究・教育の変遷をたどると「教育に活用できるのではないかという観点と方法論に関する試論」から始まり、比較的短い期間の間に、その授業実践までが行われてきているというように概観できる。

言語景観を中心に据えた教育実践とは、既述のように言語景観そのものを授業の中心におくような教材作成や1科目としてのデザインを指す。具体的には科目名として言語景観という用語が入っている、あるいはシラバスに記載されている要項の中心に言語景観が位置づけられていて、シラバスやカリキュラム、インストラクションも言語景観を通じた教育がデザインされているということであり、このように枠組みとして授業実践が行われている例は磯野(2015)以外にはない。本研究は、この「(3) 言語景観を中心に据えた教育実践」について、これまでにはない初の試みとして、具体的な教材(ビデオ教材・教科書)を作成し、かつこれらを使用して行った授業実践と学生の内容の習得について、まとまった成果を報告することを目的とする¹⁾。

2. 言語景観の教材化

街中で見かける身近な言語景観を素材として、日本語学習者が特徴的な日本語を通じて多様な社会的事象に気づき、かつ考察した結果に基づいて論理的に表現する力を獲得することを目的とした「言語景観を活用した日本語教育」を先駆的に提案し(磯野2011)、研究を継続する中で、磯野・西郡(2019)、および磯野(2020)で体系的な教材(ビデオ教材・教科書)とカリキュラムを公開した。これらは主に上級日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学などの科目のために制作・出版したものである²⁾。

- 1) 本研究で報告する授業科目は「異文化コミュニケーション」であるが、多くの学部留学生も参加する多文化クラスである。このため本研究では、このような多文化クラスにおける実践を日本語教育の一部とも位置付けている。位置づけに関しては磯野(2015)の実践を参照されたい。
- 2) 全15回の具体的なテーマと授業内容については、後述の表3.4を参照。

〈表1〉ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』（磯野・西郡2019）の概要

目的	国内外の上級日本語教育や日本語教育学、異文化コミュニケーション、社会言語学のための教材・研究用資料としての活用 国内外の日本語の言語景観の把握
内容	言語景観に関する概説 公共表示と民間表示の違いや観点 音声学・音韻論や語用論など、分野ごとに分類された言語景観の概論
活用場面 映像の時間	毎回の授業の冒頭、あるいは途中でその日のテーマに沿ったショートビデオ（3-5分） ×全15回：1本の教材ビデオとして約32分
公開方法	名古屋商科大学 磯野英治研究室 http://opinion.nucba.ac.jp/~isono/



〈図1〉ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』のオープニング

図1のように、当該ビデオ教材は昨今一般的に使われている「YouTube」にアップロードし、誰でも視聴可能な仕様になっている。視聴覚教材は、学生や教員が場所を選ばずに利用することができるだけでなく、副教材として活用する場合には、授業での導入として、概論的な内容の理解や復習に役立てられるといった利点がある（磯野2020）。また、そもそも現在では誰もがアクセスしていると言える無料動画共有サイト（YouTube）を利用した本格的な視聴覚教材の提供は、比較的新しい試みであり、西郡・磯野（2014）など、数少ないのが現状である。

表2『言語景観から学ぶ日本語』は、既述のビデオ教材を副教材として作成された主教材である。ビデオ教材の第1-15回と教科書のレッスン1-15が連携しており、当該教科書には、教師用資料として「授業での活用方法」、「各レッスンの問題・課題の解答例」を盛り込んだティーチングノートが用意されている。

〈表2〉教科書『言語景観から学ぶ日本語』（磯野2020）の概要

目的	① 言語景観を活用した1科目、1コースとして成立する学習書として作られた書籍であり、一言語としての「日本語」を段階的に学べるように構成 上級日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学での活用
内容	・序章 言語景観の勉強を始める皆さんへ—言語景観とは何か ・レッスン1~15（各レッスンは「考え方」「実践篇」「問題を解くヒント」「応用篇」で構成され、授業カリキュラムやビデオ教材と連携） ・終章 言語景観研究のこれから
活用場面	毎回の授業（計15回）で1レッスン
出典	2020年9月 大修館書店 ※授業実践時は私家版

当該教科書を使用した授業での活用方法について、端的にまとめると以下のようになる。

(1) 通常授業での活用

a. 毎回の授業の冒頭で、その日のレッスン・テーマに沿ったビデオを視聴し、当該テーマの導入に活用する。授業の冒頭でビデオを流した後は、本書の該当レッスンの【考え方】に入り、理解を深める。

b. 授業のはじめに「この言語景観から何が分かるか・面白いかな」といったケース（当該レッスン・テーマの言語景観1枚、例えば本書の各レッスンの冒頭にある言語景観）を提示し、グループディスカッションの時間を設けた上で、挙手・発言を求める。いくつかの意見を聞いた上で、ビデオを視聴して「理解の確認」に役立てる。その後、本書の該当レッスンの【考え方】に入り、理解を深める。

(2) アクティブ・ラーニング用授業での活用

ビデオの視聴、本書の課題は自学自習にし、反転学習を含むアクティブ・ラーニングのための教材として活用する。授業は自学・自習後の授業前に収集した言語景観に基づくプレゼンテーション、ディスカッションや意見交換を中心に行う。言語景観を収集するためのフィールドワークや授業でのプレゼンテーションはグループで行うため、クラスサイズに応じて、予めグループ分けをしておく。なお、授業で発表したプレゼンテーション資料は、授業でのディスカッションや意見交換の内容を反映させて修正し、レポートの作成に役立てる。

3. 到達目標に応じたカリキュラム

当該授業は1回90分、計15回で設計されており、第1回から15回のテーマは「易→難」となっている。また後述するビデオ教材、および教科書は全て授業と連携している。第1~7回までは、その言語景観を見ればどこが特徴的であるのかが比較的すぐ分かる明示的なテーマであり、それ以降のテーマは国や地域、社会に関する知識、文化的な背景や人々の言語意識への観察力、語用論的な分析力が必要となるという構成である。いずれのテーマにも通底しているのは「身近に存在する日本語を中心とした言語景観から何が分かるかを学びながら、（留学生にとっては目標言語である）日本語で授業を受け、観点や観察力の習得、および授業活動を通じたディスカッションやプレゼンテーションの技術を学ぶ」ことであ

る。具体的な内容を以下の表4、5に示す。

〈表3〉 科目概要

科目名	異文化コミュニケーション
受講者数と内訳	授業登録者数：132名（うち留学生21名）※実際の受講者は118名
時期	2020年4月～8月（半期15回）
科目の特色	国際学部の学生を中心とした専門科目（教職科目にも該当）であり、日本人学生のみならず、多くの学部留学生が受講している多文化環境である。授業は全て日本語で行い、レポートなどの課題についても同様としている。

〈表4〉 各回授業の内容

第1回 言語景観の概論（定義・対象・観点）	第2回 公共表示と民間表示の違い	第3回 音声と表記	第4回 使用文字の多様性とその効果	第5回 使用語彙の多様性とその効果
第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
ピクトグラム・記号	正用と誤用	適切性・自然さ	役割・多様性	言語と経済
第11回 方言使用と都市・地方	第12回 外国人集住地域と国際化・多民族化	第13回 電気・サブカルチャーなど特定分野における街の表記	第14回 社会的背景や使用意図	第15回 語用論的使用

〈表5〉 毎回の授業の流れ

授業の流れ	学習活動
5-10分 ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』の視聴	内容の概論的な理解
10-20分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【考え方】の解説	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の理論的な理解 ・内容の具体的な理解
15-30分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【実践篇】の演習	<ul style="list-style-type: none"> ・グループディスカッションによる意見の出し合い ・グループとしての意見の取りまとめ ・口頭で発表 ・教員と学生によるまとめ

表3について、実際には第1回「言語景観の概論（定義・対象・観点）」の前に、科目で学ぶ内容の導入として「街中にある言語景観への気づき」、第15回「語用論的使用」の後には科目のまとめとして「ビデオ教材で扱わなかった観点の紹介」「2020年オリンピック・パラリンピック東京大会や2025年大阪・関西万国博覧会への言及と多言語社会、国際化の展望」を授業の中で扱っている³⁾。

4. 授業実践と考察

本科目では、初回授業の冒頭で学生達に「言語景観に関するアンケート調査」を実施した(表6)。これは学生達の学習前の言語景観への意識を明らかにした上で、授業の中でいかにその意識が変わっていくのかに注目するためである。アンケート調査の内容は「1. 日常生活の中で、店舗の看板やポスター、掲示物などに書かれている**必要情報以外の部分**が気になることはありますか」という5段階評価の質問(①全く気にならない、②あまり気にならない、③普通、④やや気になる、⑤とても気になる)、および「2. もし気になるとすればどのようなこと(文字の形や色がかわいい、単語、表現etc)が気になりますか。また気になった言語景観について考える、あるいは考えたことがあれば具体的に書いてください(②~⑤は回答)。」という自由記述式の二つの項目を設けた。

〈表6〉 科目開始前の意識調査

全く気にならない	あまり気にならない	普通	やや気になる	とても気になる	計 (平均値)
36名	26名	27名	24名	5名	118名 (2.46)

まず5段階評価では、平均値が2.46となり、受講生の当初の言語景観への意識は高いとは言えず、①~③の回答のみでも全体の75%にあたる89名という結果になった。また自由記述式においても「イラストがお洒落だったりインパクトが強かったりしたら見たりしている。それ以外にはあんまり詳しく考えたりしたことはない」「文字の字体、色、大きさ、看板などの形、売り文句、掲示物に使われているキャラクターなど」「表現の仕方が独特だったとき」(全て原文のまま)など、表面的な内容に留まり、具体的な例はほとんど書かれていなかった。一方で、少数ではあったが④、および⑤の回答を精査すると、「何をどこに何を配置するかというデザイン性や色彩センス」「字体が可愛い、写真がいい意味で変、背景にこだわっている、文字に色がついている」「商品紹介のポスターで見出しの位置、サブタイトルの字体、全体の配色、英語表記、日本語表記の違いが気になる」「その看板やポスターに自分の好きな芸能人やアーティストが載っているかどうか」(全て原文のまま)など、やはり内容に踏み込んだ観点はほとんどない。本アンケート調査の結果は、総じて受講生たちの言語景観への意識が低い、あるいは関心が高くないことを窺わせる内容である。

次に、受講生たちが実際の内容である第2回~15回のどのテーマを選択して、期末レポートを書いたのかを確認すると表7のような結果になった。

〈表7〉 受講生たちが選んだテーマ

第2回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
3名	20名	3名	19名	5名	1名
第9回	第10回	第11回	第12回	第14回	第15回
1名	15名	14名	8名	12名	8名

まず、期末レポートを提出したのは、実際の授業参加者である118名中109名であったので、まずまず

3) ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』も同様の使用になっている。

の提出率ということができる。15名以上と提出の多かったテーマは「第4回 使用文字の多様性とその効果」「第6回 ピクトグラム・記号」「第10回 言語と経済」であった⁴⁾。第4、6、10回ともにすぐ目につきやすく、かつ論じやすいテーマのため、これらはある意味で予想できた結果である。次に多かったテーマは「第11回 方言使用と都市・地方」「第14回 社会的背景や使用意図」である。第11回については、愛知県内にも多くある尾張・三河の言葉を使用した言語景観に興味を持ってデータ収集した学生が多かったほか、長野県や石川県、大阪府など地方から入学した学生達が地元の方言を紹介する事例が見られた。第14回に多く見られたのは、やはり2020年のはじめから世界的に流行し始めたウィルス感染症に関する言語景観が増えたことを受けて、該当する言語景観を収集する学生が複数いたということである。そのほか、特筆すべき点として、以下の2点が挙げられるだろう。

第一に「第12回 外国人集住地域と国際化・多民族化」が多いのは、愛知県特有の事情からである。出入国管理及び難民認定法の改正により、日系ブラジル人の無期限就労が可能となった1990年から日系ブラジル人住民が一気に急増した保見団地を中心に、愛知県には多くの外国人定住者がおり、それはトヨタ自動車やDENSO、日本ガイシなど愛知県を拠点とする企業の数や基幹産業が盛んであることと無関係ではない。このため、愛知県内にはポルトガル語やベトナム語の表記を見かけることが多く、学生にとっても日常のことであるが、それを意識して、かつ分析できるようになったということであろう。

次に、第1回から15回のテーマは「易→難」となっている。第1～7回までは、その言語景観を見ればどこが特徴的であるのかが比較的すぐ分かる明示的なテーマであり、それ以降のテーマは国や地域、社会に関する知識、文化的な背景や人々の言語意識への観察力、語用論的な分析力が必要となるという構成であることは既述の通りである。この観点から表7を概観すると、大枠として第8～15回のテーマでレポートを書いたのは半数を超える59名であり、カリキュラムに沿った学習を行うことで言語景観への意識が高まり、かつ「どのように言語景観を観察、分析すればよいのか」を習得していることを示している。以下に学生が提出したレポートを例示する。

4) 「第3回 音声と表記」については、提出がなかった。

学生Aの期末レポート

科目名	担当教員名	学籍番号	学年	氏名	評価
異文化コミュニケーション	磯野英治		1	A	
曜日・時限	月曜・ 1,2限	レポートテーマ	街中の語用論的使用		



写真1: 自動販売機 (コカ・コーラ) ① 写真2: 自動販売機 (コカ・コーラ) ②

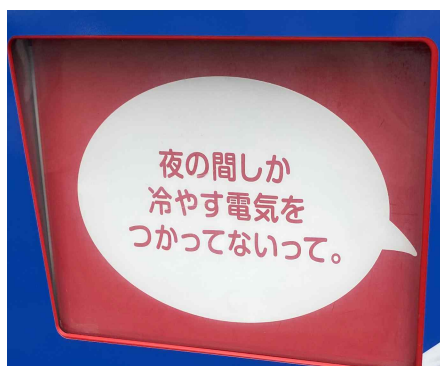


写真3: 自動販売機 (コカ・コーラ)



写真4: 新聞販売店

上記の写真は、全て語用論的使用がされている言語景観である。写真1,2,3は、同じ飲料メーカーの自販機の写真である。写真1には「こういう自販機が増えるといいなあ」、写真2には「うれしいことにノンフロンですと」、写真3には「夜の間しか冷やす電気がつかってないって」と書かれている。この語用論を考えると、共通して「この自販機は環境に配慮して作られたものです」となる。この企業は飲料の販売だけでなく、地球環境にも関心を向けている企業であるとアピールしているのである。

写真4は、ある新聞販売店に掲示されていた朝日新聞のポスターである。ここには「朝日新聞は、小論文に効く!」と書かれている。これはただ単に「小論文に効く」ということを言っているだけではなく、「小論文に効く朝日新聞をぜひ買ってください」と読み解くこともできる。また、このポスターは『大学入試を控えた高校3年生の子供を持つ親』というようにターゲットを絞っているのも特徴であると言えよう。

【参考文献】

『言語景観から学ぶ日本語』（PDF資料） 磯野英治
<https://www.cocacola.co.jp/vending-machine> コカ・コーラの自販機について

上記のレポートは、学部日本人学生が書いたレポートであり、テーマは言語景観の語用論的使用に関するものである。この語用論的使用は、第15回の授業に設定されている通り（表4参照）、言語景観に表現されている含意から「文脈の中で成立する本当に言いたいこと」を読み解かなければならないという難易度の高いテーマであるが、学生は当該テーマの内容を理解してレポートを書き上げている。期末レポートの作成は成績評価に加点されるため、留学生も含めた受講生たちは、15回の中からテーマを選び、レポートを提出した。

5. おわりに

本研究では、言語景観の教材化と教育実践について1科目、1コースとして使用できる具体的な教材とカリキュラムを示しながら、その授業実践と教育効果までを論じた。言語景観が社会言語学や地域研究（吹原・松崎・磯野・助川（2019）など）のための手段としてだけでなく、学習者に身近な学習教材として認識され、教育の一部に使用されたり、その事例研究も増えてきている。しかしながら、言語景観を中心に据えた教育すなわち1科目や1コースでの報告はなく、本研究のようにまとまった教材とともに実践研究を行ったものはない。加えて、上級日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学での言語景観の活用に関する報告はまだ多いとは言えない。今後は本研究で行った科目等での授業実践を通じた「言語景観の教育への活用」について、情報共有を図りながら学習や在学の段階を視野に入れた研究を行っていきたいと考えている。

【参考文献】

- 磯野英治(2011) 「韓国における日本語の言語景観－各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について－」 『世界の言語景観 日本言語景観－景色のなかのことば－』、内山純蔵 監修・中井精一・ダニエル ロング 編、桂書房、pp.74-95.
- _____ (2013a) 「言語景観に注目した社会的背景・地域性の分析と日本語教育への応用」 『2013年度韓国日本語日文学会春季学術発表大会予稿集』、韓国日本語日文学会、pp.157-161.
- _____ (2013b) 「言語景観を日本語教育に応用する視点」 『日語日文学研究』 第86集、韓国日本語日文学会、pp.289-302.
- _____ (2015) 「身近にある言語景観を素材とした多文化クラスにおける教育実践」 『日本語研究』 第35号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.193-200.
- _____ (2019) 「日本語教育に活用可能な言語景観と教育実践－理論と方法－」、中井精一・ダニエル・ロング 監修、李舜炯 編 『都市空間を編む言語景観』、中文出版社（韓国大邱）、pp.183-206.

- _____ (2020) 『言語景観から学ぶ日本語』、大修館書店、pp.1-160.
- 磯野英治・西郡仁朗(2015) 「ビデオ教材『東京の言語景観－現在・未来－』の制作と公開」 『日本語教育学会2015年度春季大会予稿集』、pp.259-260.
- _____ (2017) 「ビデオ教材『東京の言語景観－現在・未来－』の公開と教育実践」 『日本語教育』166号、日本語教育学会、pp.108-114.
- 鎌田美千子(2014) 「言語景観に着目した漢字テキスト作成の実践と課題－PBLの手法に基づいて－」 『日本語教育方法研究会誌』 Vol.21.No2、日本語教育方法研究会、pp.50-51.
- 甲賀真広(2019) 「短期日本語研修における自発的学習を促す言語景観調査」 『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版社、pp.207-229.
- 西郡仁朗・黒田史彦・福田寺紫陽・市川紘子 (2016) 「東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況－2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて－」 『人文学報』第512-7号、首都大学東京、pp.95-111.
- 吹原豊・松崎真日・磯野英治・助川泰彦 「韓国安山市の多言語景観調査にみる言語景観研究の現在と可能性」 pp.21-57、雑誌『ことばと文字』11号、くろしお出版・公益財団法人 日本のローマ字社.
- 李舜炯(2019) 「韓国大邱広域市の日本語の言語景観にみられる言語接触」 『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版社 (韓国大邱)、pp.231-256.
- ロング・ダニエル(2014) 「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題－日本語教育における『言語景観』の応用－」 『人文学報』第488号、首都大学東京人文科学研究科、pp.1-22.
- _____ (2017) 「語学授業に興味を持ってもらうツールとしての言語景観」 『首都大学京教職課程紀要』第1号、首都大学東京教職課程紀要編集委員会、pp.79-89.
- _____ (2019) 「日本語学習者を悩ませる言語景観」、中井精一・ダニエル・ロング 監修、李舜炯 編 『都市空間を編む言語景観』、中文出版社 (韓国大邱)、pp.257-271.

付記

이 논문 또는 저서는 2019년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임 (NRF-2019S1A5A2A03043546).

〈요지〉

언어경관의 교재화와 수업 실천
-이문화커뮤니케이션 교과목에서 비디오 교재·교과서 활용-

본 연구는 '언어경관을 대상으로 하는 교육 실천'에 대해 지금까지 시도된 바가 없는 구체적인 교재 (비디오 교재·교과서)를 작성, 이들을 사용하여 만든 수업 실천을 통해 얻어진 성과를 보고하는 것을 목적으로 한다.

해당 수업 실천은 '이문화 커뮤니케이션'이라는 국제학부 학생을 중심으로 한 전문 과목으로 하고, 참가 학생은 132명 (그 가운데 유학생 21명)의 다문화 환경이었다. 첫째, 학생들의 학습 이전의 언어경관에 대한 인식을 나타내기 위해 첫 수업의 도입 부분에서 학생들에게 '언어경관에 관한 설문조사'를 5단계평가 및 자유기술식으로 실시했다. 그 결과 5단계평가에서 평균값이 2.46으로 나타났으며, 자유기술에서도 피상적인 내용에 머무르는 수준이었다. 때문에 일상 생활에서의 수강생들의 언어경관에 대한 의식이 대체로 희박것으로 밝혀졌다.

실제 수업은 15회이며, 매회마다 비디오 교재 및 교과서에 맞는 이벤트를 15회분 준비하고 난이도가 낮은 테마에서 높은 테마 순으로 학생들이 배울 수 있도록 설계했다. 구체적으로는 제1회 ~ 7회까지는 해당 언어경관을 보면, 어디가 특징적인지를 비교적 금방 알 수 있는 명시적인 주제를, 그 이후의 테마는 국가와 지역 사회에 대한 지식, 문화적 배경과 사람들의 언어 의식에 대한 관찰력, 화용론적인 분석력을 요하는 구성으로 되어 있다. 모든 주제는 공통점을 갖고 있는 학습내용과 학습 목표는 '주변에 있는 일본어를 중심으로 한 언어경관을 통해 무엇을 알 수 있을까를 배우면서 (유학생에게 목표 언어인) 일본어로 수업을 받아 관점이나 고찰력의 습득 및 교육활동을 통한 토론과 프레젠테이션 기술을 배우는' 것이었다.

교과 내용에 대해 의식 향상과 내용의 이해, 즉 성취도를 조사하기 위해 기말 리포트를 제시해 분석한 결과, 난이도가 높은 주제로 보고서를 쓴 학생은 절반을 초과하는 것으로 나타났다. 이것은 교육과정에 따른 학습을 통해 언어경관에 대한 의식이 높아지고 "어떻게 언어경관을 관찰, 분석하면 좋을까"를 습득하고 있는지를 보여 주며, 해당 수업 실천의 효과를 뒷받침하는 결과라고 할 수 있다.

논문분야 : 일본어교육

키워드 : 언어경관, 교재화, 수업실천, 이문화커뮤니케이션

■ 이소노 히데하루(磯野英治)

名古屋商科大学 国際学部 准教授

hisono@nucba.ac.jp

■ 投稿日 : 2021년 1월 8일

■ 審査開始 : 2021년 1월 12일

■ 審査完了 : 2021년 2월 15일

■ 掲載確定 : 2021년 2월 16일